

〔巻頭言〕

学科研究紀要の存在意義

社会福祉学科長

岡 知史

上智大学社会福祉学科の学科長の重要な仕事の一つが、この研究紀要の巻頭言の執筆である。学科長1年目には「変わってきた紀要論文の読まれ方」(岡, 2016)、2年目には「紀要論文の学問的意義」(岡, 2017)と題して、それを書いた。それほど研究紀要とは何かという問題意識が私にはあった。ややしつこいようだが、再度これについて書かせていただきたいと思う。

上記の巻頭言で私が引用したのは、科学技術・学術審議会による「紀要」についての以下の「解説」であった。

大学・研究機関等において、学部、学科、専攻などの単位で刊行される学術雑誌。著者のほとんどがその大学に所属する研究者もしくは卒業生であり、刊行費用も大学が負担することが多く、大学図書館間の寄贈・交換によって流通する。(分野によっては非常に評価の高い雑誌も存在するが、レフェリー制のある学術雑誌よりは評価が低く見られることが多い。)(文部科学省, 2006)

「レフェリー制のある学術雑誌よりは評価が低く見られることが多い」という最後の一節が、どうにもひっかかるのだが、「紀要についての批判的言説は過去から多く存在している」(竹内, 2012, p. 74) ので意外なことではない。一方、近年、多くの紀要は「発行する大学(主にその図書館)がリポジトリで公開することが原則となり、オープンアクセス化が進んだ」(高橋, 2022, p. 142) ため、紀要に対する従来の否定的な印象は大きく変わりつつあるとも言える。

そこで今後の紀要のあり方、特に本学科の研究紀要である「上智社会福祉研究」の意義について、以下の3点を強調したいと思う。

まず、学会誌には掲載する論文について、全体の文字数だけではなく、さまざまな制限がある。たとえば、日本社会福祉学会機関誌『社会福祉学』投稿要領に第一に挙げられているルールには「投稿者は、共著者を含め、会員資格を得ていなければならない」とあるが(日本社会福祉学会, 2021)、これでは当事者とともに行う参加的リサーチの論文は掲載されない。また「研究目的、研究方法、研究結果、考察」という調査研究の発表のフォーマットに合わない、たとえば思想的な論考などは招待されないかぎりは学会誌に掲載されることもほとんどないだろう。紀要なら、そのような制限がなく、自由に書くことができる。

2点目は、上記のことと無関係ではないのだが、学会誌には、単一の学問の研究のために結成された学会の機関紙であることからくる限界がある。たとえば、複数の異なる学問にまたがる学際的な研究は、受け入れられないかもしれない。また、その研究手法が、その学会ではあまりに先進的であったり、稀にしか使われなかったりすると、学会内に適切な査読者や理解者がいないことになり、結果として学会誌に掲載されないという事態も考えられる。そんなときも紀要は貴重な発表の場となる。

最後に、学内紀要は「同じ大学で仕事をしている同僚と、研究を陰から支えてくれる事務職員に対して」（阿久津, 2021, p. 1）教員が、自らの研究成果を伝えるためのメディアであるということだ。本学社会福祉学科の教員の研究は、多くの異なる学問分野に広がっている。つまり全く違う学会に属していて（人事案件でもないかぎり）お互いの研究論文を読む機会はほとんどないし、論文が学会誌に出されたという情報を得ることすらない。だから、現に、私は今回ここに掲載された論文を拝読し、それぞれの教員がたいへん高いレベルの研究論文を提出されていることに驚くとともに、先生方の研究についてほとんど知らなかったことを恥ずかしながら告白しなければならなかった。

私が特に強調したいのは、この最後の点である。社会福祉士養成課程だけではなく、上智大学をめぐる状況がいま目まぐるしく変わりつつある。そのため学科は、特に学科教員は十分に話し合い、知恵を出し合って、学科の方向性を決めていくことが求められている。そのとき最も大事なものは、互いの異なる専門性を認め合い、敬意をもつことだと思う。マクロな視点から、メゾ・ミクロの視点までを含み、多様で異なる学問をバックグラウンドにもつ教員から構成されている社会福祉学科だからこそ互いに敬意をもつことが大切なのだ。

これこそが、私の心からの学科への願いであり、学科長退任にあたって私が書く最後の巻頭言の主旨としたい。

参考文献

- 阿久津洋巳 (2021) 「大学の紀要を取り巻く環境と役割」『新潟リハビリテーション大学紀要』 9(1), 1.
- 岡知史 (2016) 「変わってきた紀要論文の読まれ方」『上智大学社会福祉研究』 40, 1-2.
- 岡知史 (2017) 「紀要論文の学問的意義」『上智大学社会福祉研究』 41, 1-2.
- 高橋愛典 (2022) 「私、紀要の味方です：学術コミュニケーションの促進に向けて」『商経学叢』 66(3), 131-151.
- 竹内比呂也 (2012) 「大学紀要というメディア：限りなく透明に近いグレイ？」『情報の科学と技術』 62(2), 72-77.
- 日本社会福祉学会 (2021) 「一般社団法人日本社会福祉学会機関誌『社会福祉学』投稿要領」
https://www.jssw.jp/wp-content/uploads/call_for_paper.pdf

文部科学省・科学技術学術審議会・学術分科会・研究環境基盤部会・学術情報基盤作業部会
(2006)『学術情報基盤の今後の在り方について（報告）：附属資料2用語解説』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1337942.htm
(2024年3月12日閲覧)

2024年3月